

# 定住促進事業の軌跡と可能性

Ｉターン者の「いま」と「これから」

本誌編集部

数年前から取り組んでいる海士町の定住促進事業、その成果が実を結び、島には続々と若いＩターン者たちが集まってきている。彼らは何を求め、どんなビジョンを描いているのだろうか。その想いを語ってもらった。

「人づくり」という視点

都会を離れ島で暮らしたい、そんな生き方を希望する人が増えている。島に限らず、「田舎暮らし」という選択肢はすでに市民権を得ているといえるだろう。定年後は田舎で自給的な暮らしを、なんていうキャッチをマスメディ

アでも頻繁に目にするようになった。ただ、現実はその甘くはない。年金収入が期待できる世代ならまだしも、例えば子育て真っ最中の世代の場合はどうか。やはりネットワークとなるのは仕事や住宅の確保である。生計が成り立つ収入を得られるのか、とりあえずは安価に入居できる公営住宅などはあるのかしらん、教育機関はどの程度充実して

いるの？ などなど生活に関する不安とともに、クリアしなくてはならない課題があるはず。見切り発車で移住はしたもの、結局は定着できずに都会に戻ってしまうケースも少なくない。そんななか、海士町では平成一七年度、一年間に四三世帯九三人のＩターン者が移住している。その大半が二〇歳代から四〇歳代の若い世代というのが特徴だ。これだけの移住者受け入れに成功したのは何故か。まず第一に挙げられるのは公営住宅の増築。対象をＩターン者に限定した「定住促進住宅」、



今ではムギをつくる人もほとんどいませんが、原料もすべて島内産の海士のうどんを復活させたいんです」

海士のうどん復活プロジェクトを立ち上げたのは昨年秋から。尾崎さんがうどんに着眼した理由は、その歴史背景だけではない。うどんを打つ際に欠かせない良質の水と塩に海士町が恵まれていたからだ。この島には名水百選に選ばれた「天川の水」があり、第三セクター「(株)ふるさと海士」でつくっている天然塩「海士ノ塩」がある。これらを活かす方法として位置づけたのがうどん、というわけ。あとは小麦粉が手に入れば島内産原料一〇〇%のうどんができる。そこで尾崎さんは自らムギの栽培を手がけ、今年、収穫まで無事こぎつけた。

「でも、島の人たちに受け入れてもらえなくては、本当の意味での特産品にはなりません。島の人たちが普段の暮らしのなかで食べてもおいしいと思えるうどんをつくりたい。ですから、イベントのときにはうどんの屋台を出し

てみたり、数回に渡って島のおかあさんたちに集まってもら

って、うどんの講習会を開いてきました。

私が教える、というものではなくて、みんなで作くりましょ

う、という感じかな。

一緒に作りながら、出汁にはアゴを使っ

てみたらとか、季節の食材を具にしたり、麺に練りこんでもいいね、なんてアドバイスをしてもらったり。そんな会話から島らしいうどんのイメージがどんどんわいてくる。人と人をつなげていくようなうどん、食べものをつくっていききたいんです」

地元で生産されたものを地元で消費するだけが「地産地消」ではない。食を介して地域や人がつながってこそ地産地消である。だから尾崎さんは島の人たちとの気持ちのやりとりを大切にしている。ムギの栽培を始めたのも、



尾崎誠治さん

地元産の小麦粉が欲しかったからだけでは無い。うどんが軌道に乗れば「ムギをもう一度、つくってみようか」という農家の人や、「尾崎のためにつくってやるか」、なんて人も出てくるかもしれない。そして、生産者が増えていけば、休耕田や荒廃農地が少しずつでも再生していくのではないか。たくさんの人たちとの関わり、想いのなかから生まれるうどん、尾崎さんがつくりたいのは、そんなうどんである。

千葉県出身の尾崎さんが島にやってきたのは、インターネットの求人サイトで商品開発研修生の広告を偶然にも見かけたのがきっかけだった。そこにはこんな言葉が添えられていたという。「当たり前の日常からおもしろいものを、島の宝を見つけてみませんか」。こ

の言葉に惹かれたという尾崎さん、どうやら島の宝を発見！した様子。来年は商品開発研修生を卒業し、島のうどんで自立していくために、今は着々と準備を進めている。

一方、尾崎さんが「うどん」なら、豊政幸司さんは「馬」。今は商品開発研修生のかたわら二頭の馬、「K I R A くん」と「コンタクン」の親代わりでもある。

「西ノ島や知夫里島では今でも馬が放牧されているけど、海士でも昔は使役用に馬を飼っていたという話をたまたま聞いたんです。それがきっかけかな」  
 豊政さん自身も以前、北海道の牧場で競走馬の調教をしていたことがある。北海道の出身ですか？と聞いてみると生まれは大阪とのこと。国内に限らず、ニュージーランドやカナダ、アジアなどを旅してきた豊政さんが島に渡ってきたのは一昨年の一、尾崎さんと同じく、インターネットの求人サイトで商品開発研修生の募集広告を見たのがそもそもの始まりだった。

「とくに高い志があったわけでもなく、ワーキングホリデーみたいな感覚ですかね。将来的には島で暮らしてみたいという思いもあったし」

気の向くままに、ひらりと人生の岐路とやらを選択してきたらしい豊政さん。昔は海士でも馬を飼っていたという話を聞いたときも、「馬かあ、いいなー」と気持ちがあぐらりと動いたが、相手は生き物、さすがの豊政さんも慎重だった。かつての調教師としての経験をベースに馬の育成について改めて勉強し、馬を飼うことを役場に相談してみたところ、「おもしろいじゃない！」と予想外の反応だったとか。

「勉強したとはいっても課題は山積みだったし。放牧場も確保しなくちゃいけないし、何より金はどうすんの？でもおもしろいとなったら

即実行っていうのが海士のすごいところなんですよ。話を切り出して二ヶ月後には、もう、馬の手配がきちちゃった」

あれよあれよという間に話が進んだが、すべてを役場に頼るのは申し訳ない。そこで豊政さんは馬に興味がある仲間と資金を調達し、購入とあいなったのがK I R Aくんである。隣の西ノ島がK I R Aくんのふるさと、コンタクンも同じ西ノ島から無償で譲ってもらった。思いがけず馬のオーナーとなってしまうが、乗馬用の馬として独

学で育成を手掛けたことなかで、気づくことがたくさんあったという。

「競走馬と乗馬用とは育て方が全然違うし、国内と外国のそれも違うんですよ。日本の場合はとにかく「しばけ！」みたいな感じかな。でも、



豊政幸司さん

外国では愛情をもって接するというのが一般的。馬は本来は群れる生き物なので、外国の育成のほうがり理にかなっていないんです。犬と同じですね。しばらくだけではなくて、時々ブレッツシャーをかけながら、人間が主人だということとを教えていく。そういう馬との接し方は、馬を飼った経験のある鳥の人はよく知っているんです。KIRAKUNが島に来てからは、また、馬を飼いたいという人もぼつぼつ出てきました。放牧場の隣には保育園があつて、園児たちが「きらくくん！」なんて声援を送ったり、写生をしている姿を見ながら、こんな感じもいいなあつて。観光用に乗馬ができる馬を育てていくという選択もあるけど、島に自然と馬がいる、そんな風景をつくっていききたいかな」

最近船の免許を取得したという豊政さんは、畑や田んぼも借りて島で自活していける道を模索中である。「食料がある程度自給しながらバックパッカーたちが集う宿を開こうかなと

も思っています。

滞在中に乗馬を楽しんでもらつてもいいし。今はそのためのネットワーク、基盤づくりです」

旅の延長で海士にやつてきた豊政さんにとつて、こ

の島が安住の地となるのかもしれない。

島の農業を担い、

次世代に引き継いでいきたい

（農業研修生・掛谷祐一さん、綱島啓生さん）

昨年から町で募集を始めた「農業研修生」は、二年間の研修期間を設け、月々一五万円の生活費を保障、この間に農業で自立していく術を見につけてもらうという制度である。約七〇人の応募があり、現在海士町では三人が研修中。掛谷祐一さん（27歳）もその一人で、今年二月から島で暮らしている。



掛谷祐一さん

大阪で建設関係の会社に勤めていたが以前から農業への興味はあつたという。

「都会で生活していると、どこから始まって終わっているのか、一連のつながり見えてこ

ないんです。食べ物一つとっても、どんな人たちがどんな場所で作っているのかが分からない。人間が肌で感じる感覚みたいなものを超えてしまっている。それが当たり前だっていう世界は、考えれば考えるほど怖い。元々、NGOのように発展途上国とのつながりを担っていく仕事に興味があつたんです。労働賃金の安い国から農産物を安値で買い取るのではなくて、つくる人も食べる人も幸せになれるような関係をつくりたい。だったら自分で農業をやってみようかなと。自分でつくつたものを、自信をもって消費者に届け

る、できるだけ環境に負荷をかけない農業が理想ですね」

農業の経験がまったくなかった掛谷さんは、今は「隠岐潮風ファーム」や農家で働きながらノウハウを学ぶ日々を送っているが、現場を知るほどに農業の大変さも実感している。二年間は生活費の保障を受けられるが、それ以降は農業従事者として独立していかなくてはならない。二年なんて長いようであつという間、そこで掛谷さんは仔牛の繁殖とミカン栽培を中心に農業経営を立てていこうと考えている。今住んでいる崎集落はミカン栽培が盛んで、島のなかでも良質のミカンを産出する集落として知られているそうだ。

「すでに数ヶ所のミカン山を借りています。本数にして五〇本ぐらいかな。その半分ほどの木は収穫できる状態なので、換金作物としてすぐにでも有効です。仔牛の繁殖には、まず元牛を手に入れる必要があるのです、その資金の調達が今の最大の課題ですね。でも、うまく種がつけば一〇ヶ月ほどで出荷

できる。いずれは肥育や乳牛も手掛けたいけれど、研修期間が終わってからでも農業で生活できる基盤をつくるのが先決ですから」

なんと今年中には元牛を手に入れたという掛谷さん、その一所懸命な姿を集落の人たちも見守っている。

「農業の技術を教えてくれるだけでなく、料理を持ってきてくれたり、食事に呼んでくれたりと本当にいろいろとお世話になっています。多分、ごく心配してくれているんでしょうね。だからその気持ちに伝えていきたい。自分が農業で食べていけるようになれば、島の若い人たちも農業の後継者になっていくかもしれないし。その前例になればいいなあと思っています」

掛谷さんと同じく、崎集落に住んでいる網島啓生さん



網島啓生さん

ん(36歳)も農業研修生として昨年二月に東京から移住してきた。学生時代に農学を学んできた網島さんは実践の経験もあり、稲作を中心に黒ダイズやソバ、野菜などの栽培を始めている。籾殻や生ゴミ、海藻類、カキガラなどを配合した堆肥もつくり、土づくりを基本とした有機農業を実践中だ。そんな網島さんが今後取り組もうとしているのは、農産物の生産だけでなく、一次加工も手掛けていくこと。

「例えば黒ダイズ。ここは水がいいので甘納豆にするとすごくうまい。これを和菓子屋に卸していくというのも一つの方法ですね。

この島は水にしても農産物にしても素材としてはすごくいいものが揃っている。単に素材として提供するだけではもったいないよ。加工という付加価値をつけて

いけば可能性はもっと広がるはず」

そう、綱島さんの最大の武器は、この「もったいない！」という精神だ。島のゴミ捨て場は彼にとっては宝の山に見えるらしい。

「農機具だって修理すればまだ十分に使えるのにドカドカ捨ててある。だから拾ってきて修理して使っています。農機具の中古屋を開いてもいいかもね。注文を受けて修理した農機具を運ぶ際に、農産物も一緒に運搬すれば送料の節約にもなるでしょ」

次々にアイデアが飛び出してくる綱島さんは、そのキャラも風貌も個性的。鋤を握っていないければ渋谷あたりを歩いていても違和感がないかも。島の農家の人たちには結構強烈な存在かもしれないが、これまでにない新風として綱島スタイルは居場所を得ている。そして、島の人たちからモノづくりに対する姿勢を日々学んでいるという。

「以前こんなことがあった。苗床をつくって種籾を蒔いていたら、この列が右に五ミリずれてるぞって言って、定

規を持ってきて計り始めたおじちゃんがいんだよね。計ってみたら確かに五ミリずれていた。それで蒔き直したら、よし、真つ直ぐだなんてすごく気持ちいいよね。合理性とかではない、モノづくりへの誠意みたいなものがある。それさえ間違わなければ大丈夫、と思わせてくれるものがある」

だからこそ、綱島さんは誠意をもって農業と向き合っている。そこにホンモノがあると思うから。

「今は島の人たちから農業の技をしつかり受け継いで、それを次の世代に引き継いでいきたい。子どもは本質を見抜く目があるから、とってつけたようなものはダメ。田んぼで作業をしていると、時々子どもたちがじ



宮崎雅也さん(右)と宇野茂美さん

つと観察してるんだよね。そんな子どもたちが農業もいよいよって思えるような農業をやっていききたいですね」  
掛谷さんと綱島さん、そのスタイルはかけ離れているが、最後に語った言葉にはどこか共通するものがあった。  
.....  
交流事業が  
島と関わるきっかけでした

「宮崎雅也さん、川島稔さん」

宮崎雅也さん(24歳)は現在、「民宿たじま屋」で居候の上である。宮崎さんと海士町との出会いは昨年九月のこと。交流事業の一環として、海士中学校二年生の生徒が修学旅行で東京・一橋大学を訪ね、関博教授のゼミで海士町の講義を開いたのがきっかけだった。当時ゼミ

生として参加していた宮崎さんは、子どもたちが一所懸命に海士の話をするその姿に感動し、夏休みを利用してゼミの仲間と来島。そこで、たじま屋のご主人、宇野茂美さんと知り合ったという。

「とにかくすごい人！ というのが第一印象でした。宇野さんにほれ込んで、結局、押しかけてきちゃったんです」

宮崎さんが「すごい人！」と語る宇野さんとは、民宿の主であり、畳屋さんであり、漁業も営めば、農業も手掛ける人である。まったく関連がないようで、じつはすべてがつながっているのだ。島生まれの宇野さんは若いころに畳屋で修行し、大阪に出てから調理師の免許を取得、関西汽船で働きながら船の調理場でコックをしていた時期もある。島に戻ってきたのは昭和四〇年、畳屋を開業し、自給用に魚を獲ろうと船を手に入れた。そのうちに釣り人たちから磯に渡してくれーと頼まれるようになり、だったら泊まるどころも必要だろうと民宿を開業。民宿で出

す料理には自ら獲ってきた魚介類を並べ、野菜や米も自家製である。さらに稲ワラは畳の材料へと活用。「望まれるままにやってきたら、今の暮らしになっただけだよ」と淡々と語る宇野さんでもこれってやっぱりスゴイよ。

「そうなんです。隠岐の自然を最大限に利用している。地に足がついている力強さがあるんです。実際、民宿の仕事を手伝いながらここで暮らしてみても、自然の循環のなかで、自分もそのパーツの一つとして生かされているんだなって実感できる」

自然の循環のなかで生かされる日々、とつても魅惑的な言葉だが、言うは易しである。ときには脅威ともなる自然を相手に、折り合いをつけながら生きていくためには技が必要だ。都会の暮らしのようにお金で解決できる相手ではない。技がなければ手足をмоがれたも同じ。そんな自然を活かす技を宇野さんはたくさん持っている。些細なことであっても暮らしの技を積み重ねていくこと、その蓄積が自らを生かして

くれることを宇野さんはよく知っているのだろう。だからこそ、それら一つひとつを宮崎さんは学ぼうとしている。「じいちゃんが今やっている魚網の修繕も、最初はどやどやっているのか見ていると全然分からなかったけど、最近はやつと理解できるようになってきた。でもね、こつちがじいちゃんから吸収しているようで、逆にじいちゃんに吸収されているぞって感じることもあるんです。それくらい、じいちゃんは元氣。もう七〇歳なのに、七〇歳の鉄人！ です。ただ、じいちゃんを超えないとダメなんですよね。この島で自分が理想とする暮らしをつくっていくためには、住んでいる地域を愛せるような生き方をしたいですから」

海士町と、そして宇野さんと出会ったことで大きな転換期を迎えることになった宮崎さんと同じく、川島稔さん（22歳）もこの島との出会いを機に、自分の生き方を変えようとしている。川島さんは今年一月に開催された「若者島体験塾」の参加者の一人だった。こ

の体験塾は社会参加が思うようにいかない若者を対象にしたもので、島の暮らしや自然を体験することで他者との関わり方、生きる力をつけていこうという目的をもって海士町が開催した。川島さん自身も人との接し方に悩み、家に引きこもりがちだったが、塾に参加してから四ヶ月後の五月、自分の意志で、単身で再び島にやってきた。

「塾のときにお世話になった人たちにお礼をしたかった。それに、もう一度、島に来てみたかったんです」

それほどに、川島さんにとっては島での体験が忘れがたいものだったようだ。塾は三週間に渡って行われ、牛の世話をしたり、製塩所や老人福祉施設の仕事を手伝ったりと、からだを動かすこと、島の一員として働くことに重きを置いた内容になっていた。参加者は一〇人、基本的には共同作業であり、ときには一緒に夕食をつくることも。

「野菜を切るだけでも大変で。親はいつもこんなことをしてくれていたんだなって、ありがたいないなって初めて

感じる事ができました」

自らからだを動かすこと、仲間と共に働くなかで、人を思いやることの大切さに気づいていったのかもしれない。そして、一番こころに残っているシーンがあるという。

「浴室から海が眺望できる宿泊所に滞在していたとき、朝、お風呂に入ったんです。そのときの景色がすごくきれいで、今でもよく覚えています。窓一面に海が広がっていて、それを見ていたら自分がすごく小さく感じた。小さいことばかりにくよくよしていた自分に気づいた」

このままじゃいけない、川島さんがそう強く感じた一瞬だった。だから、もう一度、島に来た。自分を変えるために。

「ずっと焦っていたんです。人と会話をしているだけでも、いつも別の自分を演じているようで。これは自分じゃないって思っても、どうしても本当の自分が出せなかった。でも島では自然と自分が自分でいられたんです。そんな島で、

今はゆつくりでいいから、ていねいに、暮らしていきたいと思っています」

一年ほど滞在する予定の川島さん、得意のパソコンの知識を活かしながら社会教育委員会の仕事を手伝っている。

島を出ていく人、  
島にやって来る人

縁あって海士に集った人たち。そのきっかけも、これから目指すものも人それぞれだが、何か大きな可能性をみんなが島に感じていることは確かである。しかし、その一方で、あえて島を出ていく若者がいるのも、また事実。島東岸の知々井ちぢいに生まれ育つた中橋望美さん(26歳)もそんな島っこの一人だ。島を出たのは一八歳のとき、小さいころから歌手になりたかったという中橋さんは、夢をかなえるために上京した。東京でバイトをしながら音楽やダンスの学校に通い、何度となくオーディションを受けたがなかなか芽が出なかった。しかし、やっとチャンスをつかんだ。これで最後と決めたオーディション

ンに見事パスし、近々デビューすることが決定したのだ。

「決まったときはホント、嬉しかったですよ。デビュー曲は自分でつくりたかったので詩を書いてみたんだけど、なかなかいいのができなくて。そんなとき、事務所の社長に島の話をしたんです。そんないいところで育ったんだから島に帰れって言われた。島に帰って詩をつくってこいって。それで帰ってきたんです。五年ぶりですね」

久しぶりに島に戻ってきた中橋さんは、お父さんの漁業を手伝ったり、海辺を散歩したりとゆったりとした島の時間を楽しんでた。

「島に帰ってきたらリラククスできたのかな、次々に詩がわいてきて、がむしゃらに思いのたけを書いてるって感じですよ。東京にいたときは上手に書こうと焦っていたんですよ。いい詩も書けたし、そろそろ東京に帰えろかなと思ってるんですけど」  
今の中橋さんにとって島は時々帰っ



中橋望美さん

てきてここを休めるところ、暮らしのベースは東京にあるという。

「島に帰ってきて、懐かしい人たちの風景に出会うと涙がでるくらいうれしい。でも、今は東京の暮らしのほうが自分にあっているかな。ストレスがあるから創造できる、詩をつくりたいって思えるんです。でもね、不思議なの、島で歌うとすごく気持ちいい。東京ではこんなに気持ちよく歌えないから、だから島は好きですよ、大好き」  
そんな中橋さんに、海士町にイターナー者がたくさんいることを知ってる？と聞いてみると、「そうみたいです、

でも、そういう人たちと島で話したことはないかな」という返事。じつは中橋さんを紹介してくれたのは、商品開発研修生の後藤隆志さんである(四〇ページ参照)。中橋さんに話を聞いたときも後藤さんが同席してくれた。

「だから中橋さんが島に戻ってきていると聞いて、ぜひ会ってみたくったんです。これだけイターナー者がいるのに、島の同世代の人とはほとんど交流がないんですよ。お互いに向き合えば新たな展開が生まれるような気がする」

ひとしきり会話をしている二人は、まるで対になった鏡のようだった。互いが求めるもの、価値観が異なれば向かう先も当然異なる。ただ、根っこは同じ、二人とも島が大好きなのだ。違うからこそ際立つなかに、二人がまだ気づいていない島の宝があるかもしれない。相乗効果も期待できるであろう海士町の定住事業はまだまだ進化していく可能性を秘めている。